

2007,11,01

世界が尊敬した日本人(30)

冷戦を打ち破り世界平和を模索した石橋湛山首相

前坂 俊之

[静岡県立大学国際関係学部教授]

今、世界はグローバリズムの大波に翻弄されているが、2007年9月の『日本丸』の若き船長・安倍前首相の突然の政権放棄、病氣入院、辞任劇ほど日本政治の貧困を見せつけたものはない。



一国の宰相の辞任、身の引き方ほど難しいものはない。このケースは日本の政治史上にもないケースで、政治的な空白を作り、国益を大きく損なった。

これと対照的なのが、石橋湛山で、石橋は総理就任わずか2かつきほどで、己の健康問題で、政治的な空白を作っては成らないと、潔く身を引いた、その引き際の見事さは歴代宰相にないもので、今も語り継がれている。

石橋湛山は歴代宰相の中で、その国際的な見識、外交力、実行力の3拍子兼ね備えた唯一の人物といっても過言でない。

湛山は優れたジャーナリストであると同時に、経済の知識にも秀でた、また日本の国家はどの方向に進むべきかも、常に、50、100年先を見通した政治家であった。

石橋首相が就任わずか2ヵ月で、身を引いた後に、安倍の曾祖父の岸信介が首相になったのも何かの因縁を感じるが、石橋の辞任こそ戦後政治史の1つの転換点となったのである。

石橋湛山は1884年(明治17)年9月、東京港区で日蓮宗の僧侶の子として生まれた。甲府第一高校に進むが、ここで札幌農学校のクラーク博士から薫陶を受けた校長から、米国流の民主主義、自由主義的な教育を叩き込まれた。

湛山の仏教哲学と民主主義、リベラリズムの思想の融合はここで生まれた。早稲田大を卒業後、27歳で東洋経済新報に入社、月刊誌『東洋時論』の記者となり、その後新報に移り、街の経済学者、エコノミストとして次々に鋭い論説を書きまくった。

日米戦争の発火点となったといわれる日米移民問題(1913=大正 2)、第一次世界大戦での対ドイツ宣戦布告、参戦(1914)、対中国21カ条の要求(15=大正4)、シベリア出兵など日本の対外膨張政策は多くの新聞ジャーナリズムの支持を得たが、湛山一人、反対の論陣を張った。

明治以来の日本は軍事力を背景に台湾、朝鮮、満州などを植民地にする対外膨張政策『大日本主義』をとってきた。湛山はこれに反対し「力づくで外国から領土を奪っても異民族、異国民をうまく統治できない。



必ず反発をかい、独立解放運動で、最後に敗れる」と軍国主義の敗北を予見し、軍事力ではなく、互いの主権を尊重する自由貿易主義、経済中心主義の『小日本主義』(四島だけの日本で十分)を唱えた。

中国の民族独立運動に理解を示し、列強の帝国主義的な行動が失敗することをいち早く見抜き、昭和に入ってから満州事変、日中戦争、太平洋戦争への道で、一貫して警告を発し続けた唯一のジャーナリストであった。湛山の予言通り、昭和20年8月15日に『大日本帝国』は崩壊する。

敗戦に打ちひしがれ国民が悲観論一色になっている時、湛山は「更生日本の門出」で「前途は実に洋々たり」(東洋経済新報 8月25日付)で楽観論をぶち、経済大国になって日本は必ずよみがえると、これまた日本の将来を的確に予言したのだから、つくづくその洞察力には舌を巻く。

戦後、湛山は言論人から政治家に転身し、社会党ではなく、保守の自由党から出馬して周囲を驚かせた。昭和21年(1946)5月、第一次吉田内閣でいきなり大蔵大臣に抜擢された。時に61歳。



リベラリスト湛山の真骨頂はこの後半生にある。積極財政論者で経済の自力更生をめざし、イエスマンとして対米追随せず、中国のよき理解者でもあった湛山の独立不羈のその言動が、GHQから危険人物視され、約1

年後に、公職追放となった。

昭和31(1956)12月、保守合同で誕生した自由民主党で初の総裁選挙が行われ、石橋が岸信介を僅差で破って奇跡的に当選。ここに初の官僚出身ではなく、言論人・思想家の総理大臣が誕生した。

石橋首相は福祉国家の実現と世界平和の確立など掲げて、翌年1月末に全国遊説中に脳梗塞に倒れ、休養2ヵ月と診断された。



国会に出席し、予算委で答弁できないことを知った湛山は政治的な良心に従って、直ちに辞任した。日中国交正常化が期待されて船出した内閣はわずか2ヵ月間の短命に終わった。

しかし、石橋の凄さはこのあとにある。

昭和34年9月、米ソ対立、冷戦がケネディ・フルシチョフ会談で一時的に雪解けするが、石橋は脱冷戦の大構想の実現に向けて病をおして取り組んだ。

行き詰まった日中関係を打開するために訪中し、毛沢東、周恩来と会談、『石橋・周共同声明』を発表し、国交正常化へのワンステップを果たした。

世界の平和共存、日本の対米従属から自主独立を盛り込んだ「日中米ソ平和同盟」という大構想をよびかけた。

対米関係は岸、池田首相に働きかけ、ソ連には自らが飛んで、日ソ平和条約を話し合った。戦後世界の冷戦構造を打ち破るため日本がリーダーシップを発揮した唯一の例だが、その後世界情勢は冷戦が逆行し、国内でも『大風呂敷』『理想主義』として、退けられた。

それから13年後の昭和47年9月に田中角栄が日中国交正常化を実現、石橋の大構想の一端がやっと実現した。湛山は翌年4月、88歳で亡くなった。